

「武士道」概念の歴史的変遷に関する研究 ～古代から現代まで～

A study on the history of the conception of “Bushido”

~From ancient form to contemporary form in Japan~

1K06B144

指導教員 主査 石井昌幸先生

常藤健

副査 寒川恒夫先生

【はじめに】

「侍」、「武士」という言葉は、日本から海外にむけて、または海外から日本に向けて、日本を表象する際にしばしば用いられる言葉である。しかし、「武士道」という言葉について見ると、それが使われ始めたのは、武士が実態的な意味で戦士階級でなくなった江戸時代からであり、「武士道」という言葉が通俗的な形で人々の間に流布するようになったのは、むしろ「武士なき時代」である近代になってからである。なぜ「武士道」という言葉は武士という存在がなくなる明治維新から現代まで残っているのだろうか。本研究では、この事を武士という階級の成立から、武士が実際に戦闘を行っていた中世、実質的な戦士階級でなくなる江戸時代、武士そのものが存在しなくなる明治時代、軍隊がなくなる戦後までを通観しながら、「武士道」という概念の歴史的変遷について検討していく。

【第1章 実用としての武士道】

この時代に「武士」という言葉は存在するが、「武士道」という言葉は存在しなかった。成立当初の「武士道」は武士というひとつの稼業に託された生活の要求から生まれた素朴な現実的な行動の規範であり、極めて現実的な生活思想であった。鎌倉幕府が成立すると武士の身分は確立し、武士の道徳は「弓矢の道と呼ばれ、整備されていく。そして禅宗などの仏教が武士の間で広まり、「武士道」の原型が出来る。戦国乱世のこの時代に、本物の「武士道」はある。

【第2章 教養としての武士道】

「武士道」という言葉は江戸時代になってから生まれる。この時代になると、幕藩体制のもと、武士は実質的な戦士階級ではなくなり、いわば官僚化し、家臣は主君の「サラリーマン」と化していく。幕府は儒学を正学とし、「武士道」は儒教的概念体系で説明されるようになり、この儒教的「武士道」は「士道」と呼ばれる。さらに、戦闘が無くなり、代わって出版文化が形成された結果、多くの武士道書が読まれるようになる。「士道」を説くものや、『葉隠』のように「士道」に痛烈な批判をしたものなどがある。

【第3章 国家イデオロギーとしての武士道】

明治維新によって武士そのものが存在しなくなる時代になる。1882年の軍人勅諭で「武士道」は排除されるが、その精神は「軍人精神」として利用され、1890年の教育勅語では「国民道徳」として利用される。この時代に国家主義者、キリスト教者によって多くの「武士道」が生みだされ、それらは「明治武士道」と呼ばれる。国家主義者が、近代日本における国民形成に「武士道」を利用したのに対し、新渡戸は西洋のキリスト教に匹敵する日本の道徳として「武士道」を利用した。「明治武士道」は近代国家日本のあり方を映す鏡であった

【第4章 現代における武士道】

現代において、日本は武士もいなくなり、戦闘もなくなり、平和である。しかし、「武士」「武

士道」という言葉は国内外に対して今尚使われる。新渡戸『武士道』や歴史小説などの人気も衰えを知らない。新渡戸『武士道』は日本の道徳を対外に示す当初の役割を今でも担っている。しかし、「武士道」という言葉が独り歩きし、日本の精神性を語る時に便利な道具になり、何にでも貼り付けられるラベルと化している。

【まとめと考察】

「武士道」は戦闘者の思想である。確かに江戸時代の「士道」も、「武士道」を儒教的概念体系で述べたものであり、それも一つの「武士道」である。しかし、本当の「武士道」はそういった理屈ではなく、武士の本能にこそある。私は本当の「武士道」はやはり、武士が戦士階級であった江戸以前の戦国乱世の時代、戦や死と隣り合わせであったこの時代にこそあると考える。